浄蓮寺　白瀬矗墓前にて

南極探検隊長白瀬矗顕彰会

顧問　齋藤（さいとう）　充（みつる）さん

金浦郵便局長、金浦町教育委員長を歴任し、白瀬南極探検隊記念館建設委員を務めた。長きに亘り顕彰事業に携わり、今も日頃から白瀬矗のお墓の清掃を行うなど献身的に活動している。（十二林１区）

語り継げ 白瀬の偉業 夢・ロマン

五つの戒め～、皆さんはご存知でしょうか。探検家を志した白瀬矗が生涯守りとおしたと言われる、～酒を飲まない、煙草を吸わない、茶を飲まない、湯を飲まない、寒中でも火にあたらない～です。今では考えられない少し伝説じみたこの五戒ですが、私が実際にお会いした際に体験したエピソードがありますのでご紹介します。

昭和19年（1944）、戦時疎開してきた白瀬夫妻は翌年まで1年半、生家である浄蓮寺離れの書院（現在は白瀬南極探検隊記念館裏に移築）で過ごしていました。当時、私は金浦国民学校6年生で矗さんは83歳です。余談ですが、現在私は87歳ですので、当時の矗さんより4歳年上になりました。時が経つのは早いものだと身をもって感じられる今日この頃です。

にかほ市が世界に誇る偉人として学校の授業で習うのは今も昔も変わりません。ただ私の場合はその偉人が普段から町内を散歩していたわけです。日本人初の南極探検家！南極の地に大和雪原を命名しその後の英断により誰一人失うことなく南極から帰還した奇跡の隊長！さぞかし、強面で屈強な人物を想像するかもしれませんが、実際は人が好さそうで優しい笑顔が印象的ないわゆる好々爺（こうこうや）です。

前置きが長くなりましたがそんな好々爺の矗おじいさんが、父（齋藤大）を訪れた際に私も同席していました。まず驚いたのが、当時真冬の寒中であったにも関わらず素足に藁沓（わらぐつ）で来られたことです。この頃の南極探検隊長白瀬矗君偉功碑」を、皆さんご覧になったことはありますか昭和9年（1934）に立てられ、今も天気が良ければ鳥海山と日本海を望むことができます。以前は1月28日の雪中行進のルートでしたので記憶にある人もいるかもしれませんが、今は金浦公民館から浄蓮寺を経由して白瀬南極探検隊記念館を目指すためルートから外れています。難しいかもしれませんが、個人的には復活を望んでいます。

そして、浄蓮寺には白瀬矗のお墓があります。私は長年お墓参りに訪れる方々のために定期的に清掃を行っています。自身の健康のためでもありますが、先人の功績を讃え敬うという大切さを忘れないようにと、その精神をこれからの世代に身をもって伝えていくためでもあります。

市民の皆さん、9月4日の白瀬矗の命日には、ぜひ墓前で一礼をお願いします。

白瀬隊の事績がなければ、我が国の南極観測への参加は永遠になかったのではあるまいか～、これは第1次南極観測隊長を務め、当時国立極地研究所長であった故永田武氏にお会いした時に話されていた言葉です。

昭和25年（1950）「国際地球観測年」に、敗戦国として唯一参加しようとしていた日本。列国から厳しい論調で反対されるも、永田氏は日本の地球科学に対する過去の実績と白瀬隊の経験を語りながらロビー活動を盛んに行い、朝日新聞や現地の日本大使館、米ソの科学者の強力な支持を得て参加が認められました。

そして昭和31年（1956）11月8日、初代南極観測船「宗谷」が第1次南極観測隊を乗せ出港、日本の南極観測の歴史が始まりました。以来、日本の昭和基地が南極に開設されて60年が経過し、今年は第62次隊が11月に南極に向け出港する予定です。これまで本市金浦からも、齋藤公紀氏（第19次隊）、奥山四郎氏（第25次隊）、竹内智氏（第38次隊）、伊藤健氏（第46次隊）の4名が南極観測隊に参加しています。また、昭和30年（1955）には日本水産「宮島丸」が南極観測予備調査を行った際、浄蓮寺前住職・白瀬知和氏が実習生として参加しています。

世界にはばたく青少年の資質を磨き、エネルギーを膨らます場として白瀬隊の偉業を学んでほしいとの趣旨で設立した白瀬南極探検隊記念館は、今年で竣工30周年を迎えました。前項でも紹介されておりますので詳細は省きますが、構築物の設計は世界的に著名な建築家・故黒川紀章氏です。黒川氏に設計依頼を仲介してくれたのは、当時黒川事務所の海外担当営業部長として在職していた白瀬矗の孫にあたる白瀬潤氏でした。これまで、白瀬南極探検隊記念館には構造物の視察にも多くの方々が来館され、算数の教科書の表紙でも紹介されたこともあります。

開館当初を振り返ると、白瀬隊の資料が少なく展示手法に苦慮していたことが思い出されます。今は各地から関係資料が記念館に多く寄せられ、その整理、調査や検証に学芸員や職員の皆さんが、日々精力的に取り組んでいる姿にはとても関心させられます。

平成31年（2019）には、本市と国立極地研究所との包括連携協定が締結されました。また、NPO法人白瀬南極探検100周年記念会をとおした国立国会図書館や国立映画アーカイブ、南極OB会との人的交流も始まっています。白瀬南極探検隊記念館が、白瀬隊の貴重な資料の収蔵と検証、そして顕彰する日本唯一の重要施設として、さらに羽ばたくことを期待しています。

語り継げ　白瀬の偉業　夢・ロマン～、これは三重県の小林英雄さんが作った白瀬南極探検100周年のキャッチフレーズです。そして、今年は110年を迎えます。平成21年（2009）には、秋田県知事を名誉会長とした官民学による白瀬日本南極探検隊100周年記念プロジェクト実行委員会が結成され、平成23年（2011）まで全国各地で多彩な記念事業やイベントが実施されたのが記憶に新しいです。

白瀬矗は本市の偉人であるばかりでなく、その名が日本、さらには世界に知られる偉人であると誇っています。このキャッチフレーズを110周年に引き継ぎ、白瀬隊の功績をこれからも全世界へ広めていきたいと考えています。

偉人特集

白瀬南極探検隊記念館 開館30周年記念

南極探検隊長白瀬矗を今に伝える

沖の島公園にある「日本

の辺の寒さなどマイナス60度の南極を駆け抜けた矗おじいさんには何も感じられなかったのでしょうね。そして、コタツに入るよう勧めても入ろうとせず、出されたお茶も飲みませんでした。五つの戒めのうち二つが史実であることを垣間見た瞬間でした。「酒を飲まない」「煙草を吸わない」は当然として、もう一つの「お湯を飲まない」はどうでしょうか。これはそのままの意味ではなく、温かいものは食べないし飲まないということです。「みそ汁を冷ましていた」というのを白瀬南極探検隊記念館初代館長・故白瀬京子さんが自身の著書で紹介しています。ちなみに全て自前の歯でバリバリッと干し餅を食べていたのも印象的でした。

今ではこの地域でも、白瀬矗本人とお会いしている人も非常に少なくなってきており、顕彰会では私が最後の一人でしょう。このような貴重な体験は、これからも後世に語り継いでいきたと思います。

私が会った好々爺 矗おじいさん

白瀬南極探検隊記念館　雪上車前にて

南極探検隊長白瀬矗顕彰会

会長　小柳（おやぎ）　伸光（のぶみつ）さん

金浦町職員、にかほ市教育委員会教育次長を歴任しながら白瀬隊の顕彰活動に尽力。令和元年９月に顕彰会会長となり、他にもＮＰＯ法人白瀬南極探検100周年記念会事務局長も務めている。（踏切２区）